

令和5年度 連携研究スキームによる研究（政策研連携研究課題）
研究成果等最終報告書

I 最終報告書簡易版

1. 研究課題総括表

研究テーマ名	世界の食料供給体制の変化と日本の食料安全保障に関する研究
政策研連携研究課題名	食料のグローバルチェーンにおける周辺から中心への変容を試みる南米地域の実態に関する研究
研究実施期間（西暦）	2022年度 ～ 2023年度（2年間）
PO	政策研究調整官 勝又 健太郎

2. 研究の目的・達成目標

国家を含むアクターの行動の分析が可能なフードレジーム論の視点を用いて、ブラジルをはじめとする南米南部、韓国等の食料需給体制を検証し、世界のフードレジームにおける日本の位置づけと課題を整理し、我が国の食料安全保障の確保に資する政策提言を行う。

3. 研究課題を構成する研究項目及び年次計画

研究項目	2022年度	2023年度
① ブラジル大豆産業の動向分析	文献・統計データ分析・調査 →	調査・原稿作成 →
② ブラジル・アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイにおける食肉産業の動向分析	文献・統計データ分析・調査 →	調査・原稿作成 →
③ 韓国大豆産業の構造分析	文献・統計データ分析・調査 →	調査・原稿作成 →
④ アルゼンチンの農業動向	文献・統計データ分析・基礎調査 →	本調査および追加調査・原稿作成 →
⑤ 世界の食料需給動向	文献・統計データ分析・基礎調査 →	本調査および追加調査・原稿作成 →

4. 研究分担者一覧

研究項目	研究者氏名	役職・領域名
① ブラジル大豆産業の動向分析	○丸山優樹 ○林瑞穂	農林水産省農林水産政策研究所研究員 在ウルグアイ日本国大使館一等書記官・農林水産省農林水産政策研究所客員研究員

② ブラジル・アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイにおける食肉産業の動向分析	○林瑞穂	在ウルグアイ日本国大使館一等書記官・農林水産省農林水産政策研究所客員研究員
③ 韓国大豆産業の構造分析	○樋口倫生	経済協力開発機構（OECD）本部農業政策アナリスト
④ アルゼンチンの農業動向	○田澤裕之	農林水産政策研究所主任研究官
⑤ 世界の食料需給動向	○古橋元	農林水産政策研究所食料需給分析チーム長

（注）PO には◎、研究項目主担当者には○を付すこと。

5. 研究結果等

①ブラジル大豆産業の動向分析

（1）研究目的

ブラジル大豆産業を取り巻く同国の政策環境を整理するほか、国際社会から食料や環境に係る問題から着目されている大豆生産者の営農意識をベスト・ワースト・スケーリングやテキストマイニングなどの手法を活用して明らかにする。

（2）研究成果

丸山優樹・林瑞穂（2024）「大豆生産者が環境配慮型の生産を実施するボトルネックの評価ーブラジルのパラナ州を事例にー」（『農業経営研究』近刊）

林瑞穂・丸山優樹（2024）「ブラジルにおける大豆生産の現状と大豆生産者の営農意識」張 馨元・八木浩平・林瑞穂編者『大豆の政治経済学：フードレジームの視点から』筑波書房

林瑞穂（2024）「第三次ルーラ政権に対する金融市場の評価と同政権における農業部門・農業政策の動向」『ラテンアメリカ時報』1445号

林瑞穂（2023）「第三次ルーラ政権におけるブラジル農業の動向」『農業』1710号

林瑞穂・丸山優樹・八木浩平・佐野友紀（2023）「ブラジルにおける大豆生産者の大豆栽培に係る選好調査ーベスト・ワースト・スケーリング分析の活用ー」『農業経営研究』61（2）

②ブラジル・アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイにおける食肉産業の動向分析

（1）研究目的

国際社会は、ブラジルをはじめとする南米南部地域を、食料供給余力を有した一様な農業国として捉えている。しかし、これらの地域の主力農産物である牛肉産業の在り方は多様な姿を見せている。したがって、ブラジル・アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイを対象に、日本の食肉産業やブラジルの大手食肉会社に対する聴き取り等をもとに、これらの国々の牛肉産業の特性を整理してその特性の差異を明確にする。

（２）研究成果

林瑞穂（2024）「南米南部における農業生産・輸出動向とその変化―牛肉からの一考察―」八木浩平・野口敬夫・林瑞穂『日本の食料安全保障と国際環境：国・企業・消費者の視点から』筑波書房

③韓国大豆産業の構造分析

（１）研究目的

OECD-FAO 農業アウトルックによると、韓国大豆輸入は、1992 年の 111 万トンから増加し、1999 年（162 万トン）にピークを迎えた後、2022 年に 133 万となっている。このような 1990 年代の輸入増加により、1990 年代後半以降、国内供給の 9 割以上を輸入に依存する状況にある。

本研究の課題は、以上のように変遷してきた輸入大豆に焦点を当て、韓国において大豆関連産業がどのように展開してきたのかを明らかにすることにある。

（２）研究成果

樋口倫生（2024）「韓国大豆産業 ―輸入大豆からの接近」張 馨元・八木浩平・林瑞穂編者『大豆の政治経済学：フードレジームの視点から』筑波書房

④アルゼンチンの農業動向

（１）研究目的

アルゼンチンは、南米大陸の最南端大西洋岸に位置し、パンパと呼ばれる大平原を中心とした豊かな国土で多彩な農畜産業を展開する世界有数の農業生産国の 1 つである。また同国は、穀物（小麦、とうもろこし、こうりゃん等）、油糧種子（大豆等）や牛肉等農畜産物の輸出国でもあり、米国、ブラジル、カナダ、オーストラリア等と並ぶ主要輸出国の一角を占めている。

本研究では「食料供給を担う世界有数の農産物輸出大国」として、同国の農業の現状を分析したうえで、世界の食料安定供給への関与や気候変動による影響等の視点から同国農業セクターの対応や国家の役割を検討、今後の課題等を明らかにする。

（２）研究成果

田澤裕之（2023）「アルゼンチンの農業と課題 - 我が国の食料安定供給に資するグローバル・サウスへの関与 -」
「国際農林業協力」Vol.46 No.3（通巻 208 号）

田澤裕之（2023）「気候変動を背景とした異常気象下における食料の安定供給について」2024 年 9 月に学会報告予定

⑤世界の食料需給動向

i 世界大豆需給と国際市場

（１）研究目的

アジア諸国を中心に新興国及び途上国において人々が所得を向上させたことを背景に、穀物・大豆等の需要が拡大する中で、大豆については世界的な

需給の拡大とともに主要な輸入国と輸出国が限られつつあり、本研究では大豆需給のデータを用いてマクロの視点から大豆及び大豆製品市場の需給動向とこれまでの展開について明示する。

（２）研究成果

古橋元（2024）「世界の大豆需給と国際市場」張 馨元・八木浩平・林瑞穂編者『大豆の政治経済学：フードレジームの視点から』筑波書房

ii 穀物の国際市場動向

（１）研究目的

近年、穀物等の市場は不確実性の影響を受けて乱高下するとともに不安定な動きを続けた。本研究では、現在までに穀物等の国際市場において、価格高騰の時期における小麦、トウモロコシ、コメ等がどのように価格が変化したか、また主要輸出国と輸入国の変化について俯瞰的に確認する。

（２）研究成果

古橋元（2024）「穀物の国際市場動向」八木浩平・野口敬夫・林瑞穂『日本の食料安全保障と国際環境：国・企業・消費者の視点から』筑波書房

（注１） ５．研究結果等は、全研究期間をとおしての研究全体の進捗状況を５行程度で簡潔に記載し、研究項目ごとの研究結果等を簡潔に記載すること。

（注２） 学会発表、論文発表等成果の公表状況（リスト）を添付すること。

（注３） 研究成果概要図を添付すること。

（注４） 農林水産政策研究所のホームページにて公表するため、未公表データや知的財産等に関係する事項については、十分に注意して作成すること。また、公表できる内容のみを記載すること。

< 研究成果概要図 >

研究項目①：ブラジル大豆産業の動向分析

大豆生産の現場において、環境負荷軽減の生産スタイルについて追及・意識する方向にあるものの、生産コストに見合った市場がないということにより、従来型の生産に戻ってしまうという問題がある

研究項目②：ブラジル・アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイにおける食肉産業の動向分析

南米南部の牛肉産業は、世界に対して食料供給余力を有した地域として一様に捉えられてきたが、ブラジルは政府、産業一丸となり輸出振興に取り組むが、アルゼンチンは国内向けの供給を最優先として輸出税により歳入源にし、また価格安定化のため輸出制約する特徴がある。規模が小さいウルグアイやパラグアイは、トレーサビリティ・環境配慮・アニマルウェルフェアという付加価値による差別化を図っている等、各国の農業規模や国内事情に応じて千差万別

研究項目③：韓国大豆産業の構造分析

- (1)韓国では大豆輸入が急増する 1970 年代半ばから 90 年代半ばに、大豆油と大豆ミールの生産を担う大豆搾油産業が急速に発展
- (2)韓国大豆関連産業の特徴として、貿易自由化等を通じて、2000 年代以降、大豆、大豆油、大豆ミールの 3 品目の需給がいずれも輸入に大きく依存しており、相互に関連している
- (3)1990 年代半ば以降の大豆輸入の停滞は、大豆油や大豆ミールの輸入などで大豆消費が頭打ちになり、輸入需要が飽和したことがその要因

研究項目④：アルゼンチンの農業動向

農家や輸出業者等の農業セクターは、穀物等を輸出すれば貴重な外貨（米ドル）が得られることから、輸出圧力を高める傾向がある。一方、政府側は外貨獲得のメリットはあるが、過剰輸出による国内の食料不足に起因する食料価格高騰など、極端な需給の振れ幅が起こらないよう慎重な姿勢を示すケースがある

研究項目⑤：世界の食料需給動向

- (1)大豆の貿易は中国（輸入国）と米国・ブラジル（輸出国）に集約され、中国による急な政策変更等によるリスク、米国・ブラジルによる資源制約や天候要因等による輸出量の減少等のリスクがある。米中貿易摩擦時の大豆市場の動向等から、主要な輸出国や輸入国における制限等措置による大きなリスクを確認(制限実施国のプレゼンスの低下等)
- (2)小麦は、比較的伝統的な欧米の輸出国が多く、新興の輸出国が台頭する中でも、市場が比較的安定化する傾向にあったが、ロシアによるウクライナ侵攻により不確実性が増加
- (3)トウモロコシは、主要な輸出国が米国やブラジル、アルゼンチン、ウクライナ等に限られて偏在化し、中国やアジア諸国等の輸入量の増加によって、不確実性に対する脆弱性が増加

注）A 4 用紙 1 枚程度にまとめてください。パワーポイントを用いて作成しても構いません。全研究実施期間をとおしての成果をまとめてください。